

辻精磁社（つじせいじしゃ）の歴史と理念

辻家は有田焼の宮内庁御用達第一号を拝命している。1668 年、辻家三代目当主である喜右衛門（きえもん）（生没年不詳）が作った染付の皿を、仙台（せんだい）藩（現在の宮城（みやぎ）県）の藩主・伊達綱宗（だてつなむね）（1640～1711）が手に入れた。伊達がこの皿を霊元（れいげん）天皇（1654～1732）に献上すると、天皇はひどく気に入り、辻家が作った磁器の食器を皇室に納めるよう命じた。何世紀にもわたって仕えてきた辻家には、その見返りに幕（まく）と、皇室の紋章である菊花紋が入った高張提灯（たかはりぢようちん）、菊花紋が施された座布団などが与えられ、現在は応接間に目立つように展示されている。辻家は、この拝命を非常に誇りに思うと同時に喜びを感じており、何世紀にもわたってその芸術的な能力を改良していきながら、名誉ある地位にふさわしい存在であり続けている。有田焼唯一の宮内庁御用達の座は明治（めいじ）時代（1868～1912）まで続き、この頃になると他の窯元と共にその役割を拝命することになった。

1811 年、八代当主喜平次（きへいじ）（生没年不詳）は、極真焼（ごくしんやき）と呼ばれる独特の磁器焼成方法を作り出した。薪窯で焼き上げる際には、薪の燃えさしから出る灰で器に汚れが付くことがあった。喜平次が編み出したのは、蓋付きのつぼのような入れ物に器を入れる方法であった。この入れ物によって窯の煙から器が守られ、中が真空状態になることでより鮮やかに発色し、最高の品質と外観を生み出す。この入れ物は、焼きと膨張の速度が中の器と同じになるよう、器と同じ磁土と釉を使って作られる。ただ、中の器を取り出すためには、この入れ物を鉄槌で割って開かなければならない。この時ミスをしてしまうと、中の器も壊してしまうおそれがある。外側の入れ物を開けるまで、完成品がうまく仕上がっているかどうかは職人にも分からない。その難しさから、この技術は 1985 年に十四代常陸（ひたち）（1909～2007）が復活させるまでしばらくの間放棄されていた。現在の当主である十五代常陸（1939 年生まれ）は、入れ物を割って開くこの作業を、生産工程の中でも特にワクワクすると同時に緊張するものだと考えている。傷をつけてしまうか、それとも類いまれな職人技を発揮できたかがたちどころに分かってしまう。

この窯元は染付磁器で有名になったが、現在では宮内庁向けに金装飾のテーブルウェアや上絵磁器も生産している。十五代常陸は自分の息子や約 15 人の従業員と共に働き、何世代にもわたって受け継がれてきた伝統を守っている。2007 年に十四代常陸が他界する前、辻家三代は数年間窯と一緒に働くことができた。後継者となる予定の十五代常陸の息子は、しばらくこの窯元を離れ、30 歳の時に家業に戻ってきた。2 人は、家業を継続させ、窯元の職人たちが生計を立てていけるようにする責任を感じており、自分の代でこのような名誉ある家系を終わらせたくないと思っている。